

平成30年6月7日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04070

研究課題名(和文) 関係性の観点から見たアイデンティティ形成プロセスの解明

研究課題名(英文) Mechanisms of Identity formation from the viewpoint of relatedness

研究代表者

杉村 和美 (Sugimura, Kazumi)

広島大学・教育学研究科・教授

研究者番号：20249288

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、青年期におけるアイデンティティの形成プロセスを、「関係性の観点」と呼ばれる、他者との相互作用のあり方から解明することを目的とした。研究1では、アイデンティティ形成が本格化する10代終わりから20代初めの大学生を対象に、彼らにとって身近で重要な他者である仲間との対話や討論を通して、どのようにアイデンティティが構築されていくのかをリアルタイムで記述し、その機序を明らかにした。研究2では、青年のアイデンティティ形成において関係性が重要であることが、文化をこえて認められるかどうか検討した。それにより、関係性が、アイデンティティ形成の機序を解明する普遍的な観点として機能することを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to unravel the process of identity formation in adolescence from the viewpoint of relatedness. Here, we defined relatedness as the ways in which individuals interact with others in their identity exploration. First, we conducted a short-term longitudinal study with university students in Japan and observed how these students constructed their own identities through discussions with their peers. We analyzed the data particularly focusing on getting insights into the mechanisms involved in the process of identity formation. Second, we conducted a comparative study to examine as to if and how the relatedness is important in the process of identity formation. This second study used adolescents in Japan and the Netherlands. In doing so, we intended to demonstrate that relatedness works as a mechanism of identity formation in both Western and non-Western cultural contexts.

研究分野：発達心理学

キーワード：教育心理学 発達 青年期 アイデンティティ

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 青年期の若者にとって、自分がどのような人間で、この社会の中で何をして生きて行くのかを模索し決定すること、すなわちアイデンティティの形成は重要な発達課題である。しかし、アイデンティティがどのような道筋・機序で形成されるのかについて、研究の歴史は始まったばかりである。これまでに、比較的大規模な縦断研究によって 10 代から 20 代初めにわたるアイデンティティの状態の変化が明らかにされるなど大きな進展を見せている (Meeus et al., 2010)。ところがこれらの研究は、アイデンティティの類型 (アイデンティティの状態を 4 種類に分類したもので、「アイデンティティ・ステータス」と呼ばれる) に焦点を当て、青年が時間と共にどの類型からどの類型へと変わることかを捉えているものの、発達の最も重要な問題、つまりある類型から別の類型へと、なぜ、どのようにして変化が起こるのかという機序の解明には取り組んでいない。この問題に切り込むには、個人レベルの青年に焦点を当て、日常的な文脈とどのように関わりながらアイデンティティ形成をしていくのかを精緻に記述しなければならない。そのようなアプローチの 1 つとして有力視されているのがダイナミック・システムズ・アプローチ (DSA) である。既にオランダの研究グループが DSA によるアイデンティティ発達の機序を検討し始めており (Bosma & Kunnen, 2008; Kunnen, 2012)、申請者もこの 10 年ほど本法を勉強してきた。ただ、DSA を独習することは大変難しく、実際の研究に適用することが十分にできなかった。このたび、2014 年に日本発達心理学会国際ワークショップに Bosma, Kunnen 両博士を講師として招聘し、申請者はそのホストを務めながら実際に学ぶ機会を得るなど、本法を実際の研究に適用する素地が整った。そこで本研究を科研費事業として申請し、青年が日常的な文脈、とりわけ他者との相互作用という視点を通して、アイデンティティを形成するプロセスを、その機序も含めて解明する取り組みを本格的に開始することとした。

(2) アイデンティティの形成プロセスを明らかにするうえで、他者との相互作用という視点が重要であることについては (以下、これを「関係性の視点」と呼ぶ)、申請者はこれまでの研究である程度明らかにしてきた。欧米の研究者もこの視点を重視している (Schachter & Marshall, 2010)。しかし一方で、普遍的なアイデンティティ形成の機序として申請者が提唱した関係性という視点が、集団や他者との調和を重んずる日本文化 (あるいは東洋文化) に顕著なものとして理解されているという現状がある (例えば Phinney & Baldelomar, 2011 のレビューの中での申請者の研究の位置づけではそれが明らかである)。実際、理論的に検討すると、

個人の独自性や達成の強調を発達の目標とする欧米文化におけるアイデンティティ形成と我が国におけるそれとでは、形成プロセスで他者をどのように利用し、その視点をどう取り込むのかが異なる可能性も否定できない。そこで、関係性が文化をこえてアイデンティティ形成の根底をなす中核的なプロセスであることを確認する、いわば外濠を埋める研究が必要となる。

## 2. 研究の目的

本研究は、青年期におけるアイデンティティの形成プロセスを、他者との相互作用のあり方 (関係性の観点) から解明することを目的とする。アイデンティティ形成が本格化する 10 代終わりから 20 代初めの大学生を対象に、彼らにとって身近で重要な他者である仲間との対話や討論を通して、どのようにアイデンティティが構築されていくのかをリアルタイムで記述し、その機序を明らかにする。加えて、青年のアイデンティティ形成において関係性が重要であることが、文化をこえて認められるかどうかとも検討する。それにより、関係性が、アイデンティティ形成の機序を解明する普遍的な観点として機能することを明らかにする。具体的な研究目的は、以下の 2 点である。

(1) 研究 1 : 他者との相互作用からアイデンティティがどのようにして構築されるのかを検討する。アイデンティティの形成は年単位で進むが、その長期的なプロセスを支えているのは、より短い時間で展開される個人と文脈との相互作用である。この相互作用の重要な 1 つとして、青年と仲間との会話に着目する。

(2) 研究 2 : 関係性という観点が、アイデンティティ形成の中核的なプロセスの解明において、文化をこえて機能しうるのかを確認する。日本人青年と、個人主義的、相互独立的自己観の優勢な文化圏にあるオランダ人青年とを比較し、関係性のあり方にどのような共通性や差異があるのかを明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1) 他者との相互作用を通じたアイデンティティ形成プロセスの検討 (研究 1)

同一の青年群を対象に、彼らがアイデンティティに関する話題について議論を行う場面を設定し、そこでの会話をデータとすることで、個々の青年がアイデンティティ形成において他者の視点をどのように認識し、利用し、取り入れながら、自己の視点とすりあわせ、統合し、アイデンティティとして結実させていくのかを明らかにする。データの収集と分析の観点としてダイナミック・システムズ・アプローチ (DSA) を用いる。DSA では、明らかにしたい心理現象を“時間と伴に変化するシステム”として理解する。本研究では関係

性の観点から見たアイデンティティをひとつのシステムと捉え、まず、システムの時間に伴う変化を全体的に査定する。加えて、会話の展開の中で、このシステムを構成する要素（会話に見られるコミュニケーションの諸パターン：共感、対立など）がどのように関連し合い、またその関連が時間と共にどのように変化していくのかを検討する。

## (2) 異なる文化的文脈における「関係性」の共通性と差異の検討（研究2）

アイデンティティ形成の途上で（具体的にはアイデンティティを探索する際に）青年が重要な他者の視点を認識し、利用し、自らの視点に協応させていく程度や仕方はいくつかのレベルがあることが分かっている。これらは、研究1において関係性のシステム全体を査定する際にも用いられる。しかし、これらのレベルは、申請者が日本人青年を対象として見いだしたものであるため、個人と他者や集団との協調的関係を重視する集団主義（Triandis, 1995）や、そうした文化で優勢な相互協調的自己観（Markus & Kitayama, 2010）に特有な視点である可能性を否定できない。したがって、日本人青年と、個人主義的、相互独立的自己観の優勢な文化圏の青年とを比較し、関係性のあり方にどのような共通性や差異があるのかを明らかにするための調査を行う。個人主義的文化の青年としては、オランダ人青年を対象とする。

## 4. 研究成果

### (1) 平成27年度

研究1の準備：ダイナミック・システムズ・アプローチの視点を取り入れ、他者との相互作用を通してアイデンティティが構築されるしくみを検討するための理論的枠組みと方法の策定を行った。具体的には、(a)システム全体（関係性の視点から見たアイデンティティ）、(b)構成要素（コミュニケーションに表れる自己と他者の視点の協応の仕方）の概念的な関係を整理する作業を行った。

研究1のデータ収集：日本人大学生12名を対象に、9週間（約3ヶ月）、3名でのグループ・ディスカッションの場を設定し、アイデンティティに関する話題に関する討議（会話）の内容を記録する。話題は、大学生にとって重要な学業、恋愛、将来・進路とした。

### (2) 平成28年度

研究1のデータ分析：討論期間の最初と最後に査定される関係性については、(a)アイデンティティの領域ごとに、準備段階で策定された評価基準に基づき各対象者のレベルを評価、(b)事前から事後にかけてのレベル変化に着目して、対象者をレベル上昇、安定、下降群に分類、(c)上昇群の各対象者に注目して、仲間との間で交わされたコミュニケーション・パターンの変化、パターン間の関連の変化、及び情動の変化との関連

を検討、(d)関係性のレベルの安定群、下降群についても同様の分析を行い、アイデンティティ・システムの変化（あるいは安定）が、いかなるコミュニケーション・パターンの変化（安定）によって説明されるのかを明らかにする作業を行った。

関係性を捉える方法の日本版・オランダ版の作成と整備（研究2の準備）：研究1で用いた「関係性のレベル」及び「コミュニケーション・パターン」が、アイデンティティ形成の機序を検討するうえである程度の普遍性を持つ指標であることを確認するため、同じ方法、カテゴリーを日本人青年とオランダ人青年の両方に適用するための手法について策定する作業を行った。

### (3) 平成29年度

研究2の準備：日本とオランダの大学生各30名を対象に、関係性を捉える面接を実施し、(a)関係性のレベルの分類と分布、(b)アイデンティティを探索する過程での自己と他者の視点の協応の仕方の特徴のそれぞれについて、まず日本人青年を分析した後に、同じ分析をオランダ人青年に適用し、共通性と差異を検討することとした。しかし、両国で実施する面接法と分析の観点について検討を行う途上で、特に分析の観点について様々な克服すべき課題が見出されたことから非常に時間が費やされ、準備の途上で年度を終えることとなった。そのため、実施に関しては本補助金終了後も引き続き、申請者が再度オランダを訪問して行うこととなった。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

Sugimura, K., Crocetti, E., Hatano, K., Kaniusonyte, G., Hihara, S., & Zukauskienė, R. (2018). A cross-cultural perspective on the relationships between emotional separation, parental trust, and identity in adolescents. *Journal of Youth and Adolescence*, 47, 749-759.

[査読有]

DOI: 10.1007/s10964-018-0819-4

Sugimura, K., Nakama, R., Mizokami, S., Hatano, K., Tsuzuki, M., & Schwartz, S. J. (2016). Working together or separately? The role of identity and cultural self-construal in well-being among Japanese youth. *Asian Journal of Social Psychology*, 19, 362-373.

[査読有]

DOI: 10.1111/ajsp.12154

〔学会発表〕(計 7 件)

Sugimura, K., Zukauskiene, R., Crocetti, E., Kaniusonyte, G., Nakama, R., Hatano, K., & Tsuzuki, M. (2017, May). Relationships between separation, connectedness, and identity in Lithuanian, Italian, and Japanese adolescents. Poster presented at the 24th Annual Conference of the International Society for Research on Identity, May 18-21, 2017, Groningen, the Netherlands.

Hatano, K., & Sugimura, K. (2016, September). Developmental changes of exploration and commitment dimensions in Japanese adolescents: A four wave longitudinal study. Poster presented at the 15th Biennial Conference of the European Association of Research on Adolescence, Cadiz, Spain.

Sugimura, K. (2016, September). Not described in textbooks! Some specific challenge for understanding identity development in Japanese adolescents. Paper presented at the 15th Biennial Conference of the European Association of Research on Adolescence, Cadiz, Spain.

Sugimura, K., Nakama, R., Mizokami, S., Hatano, K., & Tsuzuki, M. (2016, July). The relationships between separation, connectedness, and identity: A reconsideration with Japanese adolescents. In K. Sugimura & E. Crocetti (Chairs), Adolescent psychosocial development. Symposium conducted at the 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan.

杉村和美 (2015) 日本の青年における親からの分離 自主企画シンポジウム(溝上慎一企画)「日本の青年期発達をいかに理解すべきか: 欧米の知見はどこまで適用可能なのか」教育心理学会第 57 回総会発表論文集, 66-67. (2015 年 8 月 27 日, 新潟, 新潟大学)

Sugimura, K., Nakama, R., Mizokami, S., Hatano, K., & Tsuzuki, M. (2015, October). Radical and moderate separation from parents in Japanese emerging adults: The relationship with autonomy, identity, and well-being. Paper presentation at the 7th Conference of the Society for the

Study of Emerging Adulthood, Miami, FL, USA.

Sugimura, K., Nakama, R., Mizokami, S., Hatano, K., Tokuoka, M., Nishida, W., & Tsuzuki, M. (2015, May). Does separation from parents really matter for identity formation? A reconsideration with Japanese adolescents. Paper presentation at the 22th Annual Conference of the Society for the Study on Identity Formation, Bellingham, WA, USA.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉村 和美 (SUGIMURA, Kazumi)  
広島大学・大学院教育学研究科・教授  
研究者番号: 20249288

(2) 研究分担者

( )

研究者番号:

(3) 連携研究者

丹羽 智美 (NIWA, Tomomi)  
四天王寺大学・教育学部・講師  
研究者番号: 50625936

松岡 弥玲 (MATSUOKA, Mirei)  
愛知学院大学・心身科学部・講師

研究者番号：30571294

(4)研究協力者

( )